ユネスコスクール活動事例集

第 4 集

愛知県

愛知県教育委員会

目　次

ユネスコスクール 活動事例①	犬山市立東小学校	2
ユネスコスクール 活動事例②	東浦町立緒川小学校	4
ユネスコスクール 活動事例③	豊田市立土橋小学校	6
ユネスコスクール 活動事例④	豊橋市立岩西小学校	8
ユネスコスクール 活動事例⑤	岡崎市立竜南中学校	10
ユネスコスクール 活動事例⑥	豊橋市立中部中学校	12
ユネスコスクール 活動事例⑦	名古屋市立宝神中学校	14
ユネスコスクール 活動事例⑧	中部大学春日丘中学校	16
ユネスコスクール 活動事例⑨	名古屋市立名古屋商業高等学校	18
ユネスコスクール 活動事例⑩	愛知教育大学附属特別支援学校	20
ユネスコスクール 国内交流派遣①	あま市立甚目寺小学校	22
ユネスコスクール 国内交流派遣②	岡崎市立新香山中学校	24
ユネスコスクール 国内交流派遣③	名古屋大学教育学部附属中・高等学校	26
愛知県ユネスコスクール交流会		28

はじめに

ユネスコスクールは、ユネスコ憲章に示されたユネスコの理念を実現する学校です。現在、世界182以上の国・地域で10,000校以上のユネスコスクールがあり、日本国内の加盟校は、ユネスコ本部加盟申請中の学校を含め、1,044校を数えます（平成28年11月現在）。愛知県では、2014年11月に名古屋市で開催された「持続可能な開発のための教育（ESD）に関するユネスコ世界会議」を契機としてユネスコスクールの加盟が急増し、現在申請中を含め163校が加盟しており、国内最大規模となっています。

文部科学省及び日本ユネスコ国内委員会では、ユネスコスクールの活動の質を確保するため、ユネスコスクールガイドラインを策定していますが、ユネスコスクールとして大切なこととして、第一に「国内外のユネスコスクール相互間のネットワークを介して、互いに交流し、相手の良さを認め合い、学び合うこと」を挙げており、交流の促進が重要課題とされています。

本年度、愛知県教育委員会では、昨年度に引き続き、ユネスコスクールの活動の質的向上と、ユネスコスクール同士の交流を目的とした支援事業を実施しました。具体的には、児童・生徒・教員が交流し、学び合う「愛知県ユネスコスクール交流会」の開催をはじめ、児童・生徒の県外ユネスコスクールへの派遣、ユネスコスクールへの研修講師派遣、全国大会等研修会への教員派遣等です。また、今年度は「公民館とユネスコスクールとの連携によるESD推進事業」も実施し、地域や各種団体と連携した取組も進めてまいりました。

現在審議が進められている次期学習指導要領においても、今まで以上にESDの視点が盛り込まれており、課題の発見と解決に向けた「主体的・対話的で深い学び」を重視したESDの推進が期待されています。そのような中で、ESDの推進拠点として位置づけられているユネスコスクールには、今後さらにESDの実践効果を高める取組を先導するモデル校としての期待が高まっています。

今回発行したこの事例集は、県内各地でESD活動に取り組むユネスコスクールの実践をまとめたものです。本事例集が、ユネスコスクールへの加盟の有無を問わず、全ての学校のESDの充実と広がりにつながるきっかけとなることを願っております。

最後に、本事例集作成にあたり、御協力いただいたユネスコスクールの先生方、及び関係市町村教育委員会をはじめとした関係の皆様に心より感謝を申し上げます。

2017（平成29）年２月

愛知県教育委員会

環　境　国際理解
地域文化　人　権
生物多様性　防　災
エネルギー　そ の 他

犬山市立東小学校

創　立：1979年
住　所：〒484-0802 犬山市羽黒安戸西一丁目2番地
連絡先：TEL 0568-67-5400　FAX 0568-69-0337
学級数：17　児童数：392人
H　P：http://www2.schoolweb.ne.jp/weblog/index.php?id=2310189

自ら行動し、未来を切り拓く児童の育成

はじめに

本校は、2014年にユネスコスクールに加盟し、本年度で3年目となる。ESDの視点に立った学習指導の目標は、持続可能な社会づくりに関わる課題を見い出し、それらを解決するために必要な能力や態度を身に付けることである。この目標の達成をねらいながら授業設計や授業改善を行うことにより、持続可能な社会の形成者としてふさわしい資質や価値観を養うことができると考える。今年度は、「自ら行動し、未来を切り拓く児童の育成」を研究テーマに掲げ、総合的な学習の時間を軸として、各教科や特別活動を相互に関連付けながら、様々な教科・領域で実践を重ね、その成果を基に本校独自の教育課程の編成に努めている。3年生「生き物から見つめる私たちの未来」、4年生「福祉を通してともに生きる社会」、5年生「お米から見る日本」、6年生「世界から見る日本」を学年テーマとし、ESDの視点に立った教育活動に取り組んでいる。主に、5年生の活動事例について報告する。

実践内容❶
「日本の未来を考える討論会」

ねらい：日本の現状を知り、農業と科学技術の2つの視点から日本の未来を考える。

5年生は、「今、日本に必要なことは、農業を守ること？科学技術を発展させること？」というテーマで討論会を行った。国語科「インスタント食品と私たち」では、主張や質問、反論の仕方を、国語科「グラフや表を用いて書こう」では、自分たちの主張に合わせた統計資料やグラフを用いる方法を学んだ。また、社会科「工業地域と工業生産」では、戦後日本は技術の発展とともに、工業生産額を増やし、豊かな国となってきたことを理解した上で、討論会に臨んだ。科学技術を更に発展させ、日本の工業生産額（290兆円）を増やすことが、更なる日本の発展に繋がると発言したり、稲作体験で得られる人と人とのつながりの大切さを根拠に反論したりする児童もいた。食の安全性や地球温暖化などの問題も話題になった。社会科の学習で得た知識や稲作体験で得た体験を根拠とした討論会となった。討論会で出た意見や考えをもとに、「今、日本に必要なことは、農業を守ること？科学技術を発展させること？」というテーマで意見文を書いた。国語科で学んだ意見文の書き方を活用し、社会科の教科書や資料集のグラフや表、稲作体験等の写真を用いて、自分の考えや主張をまとめた。田んぼには、洪水を防ぐ役割があり、生き物のすみかであること、稲作は日本の伝統であることをまとめた児童もいた。また、科学技術を発展させることで誰もが不自由なく暮らせること、宇宙開発を進めることで人口問題を解決できるのではないかと意見文にまとめる児童もいた。

日本の未来を考える討論会

成　果

稲作体験を出発点に、社会科の授業で得た知識をもとに、日本の現状や未来について討論することができた。知識を理解することだけにとどまらず、得た知識を活用しながら話し合うことで、考えを深めることができた。現状を打破するために、自分たちには何ができるのかを考えるきっかけとなった。

実践内容❷
「自分たちにできることに取り組もう」

ねらい：日本を元気にするために、自分たちにできることに取り組む。

5年生は、「お米から見る日本（今、日本を元気にするためにできることは）」というテーマで活動を続けてきた。グループごとに米のよさをPRする計画を立て、実行に移した。実際に取り組んだ内容としては、①お米シャンプーの製作 ②お米料理大百科の製作 ③稲作の発祥を伝えるペープサートの製作 ④お米ソングの制作などである。現状を打破するアイデアを考案するグループもあり、科学技術で農業を発展させ農家を助けて、米の収穫高を増やせるのではないかと考えを発表した。製作したシャンプーや大百科、児童の提案をまとめたポスター等を犬山市役所や校区のスーパーに展示してもらい、市民に発信した。

グループのまとめを犬山市役所に展示

成 果　取り組んできた活動の成果を、学校内だけでなく、多くの方々に伝えることができた。ESDの目標でもある、現代社会の課題を自らの課題として捉え、身近なところから取り組むことで、課題解決につながる新たな価値観や行動を生み出すことができた。

実践内容❸
「未来設計図をつくろう」

ねらい：夢や目標を明確にし、毎日の具体的な目標をもち、夢に向かって行動する。

5年生では、「お米から見る日本（今、日本を元気にするためにできることは）」のまとめとして「未来設計図」を描いた。日本人である自分にできることを考える上で、大切になるのが「自分のよいところ」に気付き、そのよさを生かすことである。「自分のよさ」に気付くことができるように、道徳では、我が国の偉人について学んだり、愛国心を育てたりする授業を行ってきた。また、特別活動では年間4回、野外学習や運動会などの学校行事後に自分のよさを見つけてきた。大きな夢、志を堂々と語ることができる大人に成長してほしいと願っている。

5年生女子児童の未来設計図

成 果　夢（大目標）をもち、その前段階として中目標を決め、中目標を達成するための具体的な行動目標を立てることで、毎日の生活での目標が生まれ、活力へと繋っている。また行事ごとに、自分自身を見つめ直す機会をもつことで、自分の成長を振り返り、次へのステップとする。

おわりに

市役所に児童の製作物を展示していると、市民の方に声を掛けていただいた。「5年生の子ども達がこんなに日本のことを真剣に考えているんですね。私たち大人が、将来のために、真剣に考えないといけませんね。」ESDの理念でもある、現代社会の課題を自らの問題として捉え、身近なところから取り組むことで、課題解決につながる新たな行動を生み出し、地域に発信できた。地域に発信することで、多少なりとも犬山市に影響を与えることができた。小さな一歩かもしれないが、確実な一歩である。確かな一歩を積み重ねることが未来の日本や地球を救うと信じて、これからも児童とともに、ESDの視点に立った、教育活動を展開していきたいと思う。

環境 | 国際理解 | 地域文化 | 人権 | 生物多様性 | 防災 | エネルギー | その他

東浦町立緒川小学校

創　立：1872年
住　所：〒470-2102 知多郡東浦町大字緒川字八幡7
連絡先：TEL 0562-83-2034　FAX 0562-83-8510
学級数：19　児童数：539人
H　P：http://ogawashou.blog119.fc2.com/

持続発展可能な明日を創る教育課程の実践

はじめに

本校は東浦町の中心にあり、徳川家康の生母於大の方が生まれた緒川城址が校区にある学校である。開校以来地域に愛され、見守られてきた学校である。1978年にオープン・スクールとして生まれ変わり、個性化教育、個別化教育を柱に教育活動を実践してきた。ESDの実践をして７年目、ユネスコスクールとして５年目を迎えている。国立教育政策研究所より提案された身に付けたい力の７つから、ESDで育てたい３つの力「かかわる力」「問い続ける力」「行動に移す力」と整理し、これまでの活動を見直し、さまざまな活動に取り組んでいる。

実践内容❶
「２年　えがおいっぱい　お川の町　たんけんだん」

ねらい：身近な地域の人やさまざまな場所に関心をもち、見たり調べたりし、地域に愛着をもつ。

校区内の身近な12の施設（役場・図書館・郵便局・人形店・写真館・和菓子屋など）の中から学級を解体し、子ども一人一人の思いを大切にして探検場所を決め、学習する計画を考える。施設を見学するにあたり、活動班でインタビューする内容を考え、直接働いている人にインタビューすることで、ひみつや大切にしている思いについて知る活動を行う。その後、学年全体で報告会を開き、情報の共有を行い、相違点についての話し合いを行う。報告会を通して感じたことを深めるために、もう一度探検場所へ見学に行く。繰り返し見学しインタビューすることができたため、インタビューした相手から、自分のことだけでなく、相手のことを思って取り組んでいること、すなわち働き手の地域やお客に対する思いをつかむことができた。

真剣に緒川のよさを話し合う歌詞作り

見学したことを基に、「見学場所ベスト３」として新聞にまとめる。クラスに戻り、今までの学習の成果を伝える発表会を行う。この発表会を通じて、子どもたちの中に緒川の町のすばらしさ、自慢できることが湧いてきた。緒川のよいところが分かる歌を創ろうと各クラスでグループを作り創作を行う。３クラスで12番まで緒川のよいところが伝わる歌が完成した。人のよさや緒川の人が大切にしている思いを13番としてまとめ、全校集会で発表した。子どもたちからは必然的に、お世話になった施設に伝えたい思いが高まり、CDにして配付をした。

成果

子どもたちは毎年各施設に訪れ、多くの情報を得て学習させていただいている。今回は地域に還元することができるとよいと考え実践した。教師が考えている以上に、子どもたちは学習の成果を地域に還元していきたいという思いが強いことが分かった。地域を愛する活動につながる学習となった。

実践内容❷

「3年　つながりさがそう ～わたしと東浦・わたしと昔～」

ねらい：今と昔を比べることで違いに気付き、自分について考え、目標をもち行動することができる。

ありがとうの会で工夫して伝える児童

地域の老人会「東楽会」の方をゲストティーチャーとして、昔の遊びやくらしについて、戦争の頃の話について教えていただいた。遊びについては、現在のようなテレビゲームではなく、身の回りにあるものを工夫して遊び道具にしていたことについて知り、実際に竹ぽっくり、竹馬などを作って遊びの体験をした。戦争の頃の話については、99歳のおばあさんから大人として感じた戦争、当時小学生の方からは子どもとして感じた戦争について話を伺った。質問に答えていただくことで、子どもたちは、戦争について「自分事」として考えられ、絶対に起こしていけないことであると感じた。学習の最後に、「東楽会」のみなさんに感謝を伝えるありがとうの会を行った。そこで、子どもたちが学習した今と昔のつながりと違いについて一人一つずつ発表した。

成 果　昔と今をつなげるためには体験をすることが不可欠であると感じた。子どもたちは体験を通じて今との違いを感じることができた。教えていただいた地域の方との関わりも深まり、思いやる気持ち、尊敬する気持ちを高める活動になった。

実践内容❸

「6年　未来に向かって生きるわたしたち」

ねらい：6年間の学習を振り返り、他との違いを見つめつつ自分がどう生きたいかを考え続ける。

協力してわたしたちの作品を制作

「自分事」として考えるというテーマをもとに、一人一人興味のある国と日本との違いについて調べた。一人一人の学びを保証するために、図書館より200冊を超える外国に関する書籍を借りてきた。じっくり情報を吟味してほしいという思いから、コンピュータではなく、書籍から調べ学習を進めた。発表会を行うことで多くの国と日本との違いについて知ることができた。また、世界と日本の関係だけでなく、自国の文化を深めるために、奈良への修学旅行を通して見学や体験を行った。薬師寺の説法や西大寺の大茶盛り体験は貴重な体験となった。その学習の成果を表現する場の一つとして、アートマイル事業への参加を行った。フランスの学校と共同制作を行うために、電子メールを用いて交流を行い文化や習慣を伝え合った。互いのよさを認め合う作品を作ることができた。

成 果　実際に海外の同世代の人とアートマイル事業によってつながりをもつ活動は、国際社会を生きる子どもたちにとって貴重な経験になった。日本を紹介するためには、子どもたち自身が日本のことについて知る必要があることに気付くことができた。

おわりに

豊かな関わりの中で自立した個を育む学校の創造を目指し、実践して4年が経過した。少しずつ教師の考え方が変わり、子どもたちも「自分事」として考えられるようになってきた。授業実践だけでなく、学校で行う全ての活動においてESDの実践を意識して取り組むことが、持続発展可能な明日を創っていくことだと感じる。その上で本校は、開校以来培ってきた地域との連携や子どもたちの個性を伸ばしていくことに自信をもって取り組み、自分を愛し、地域を愛し、未来に希望のもてる子どもたちの育成を継続していきたい。その成果を評価する上にも、SDGsの視点に立って教育課程を見つめ直していくことが大切である。

環境 | 国際理解 | 地域文化 | 人権 | 生物多様性 | 防災 | エネルギー | その他

豊田市立土橋小学校

創　立：1979年
住　所：〒471-0842 豊田市土橋町一丁目117番地
連絡先：TEL 0565-29-5285　FAX 0565-26-6278
学級数：14　児童数：346人
H　P：http://www2.toyota.ed.jp/swas/index.php?id=s_tsuchihashi

持続可能な未来を創る　エコガイドの育成

はじめに

本校は、開校時、地域の方々が学校のまわりに木を植え、現在は3,000本近い木に囲まれ、緑豊かな学校になった。そうしたことから、開校当初より、環境教育に力を入れ、ビオトープや樹木の整備などを行ってきた。そうした取組を背景に、平成21年度に環境省の「エコフロー事業」のモデル校として校舎の改修工事が行われたことから、平成24年度よりESDの研究に本格的に取り組み始め、本校独自のカリキュラム「ESDカレンダー」に基づいた学習を進めてきた。以来、本校は「つながる学校」をキーワードに掲げ、ESDカレンダーを通して各教科・領域がつながる体験や参加型学習を通して人と地域がつながる学校を目指している。

実践内容❶
「6年　目指せ！特級エコガイド」

ねらい：実験や測定から学んだことをエコガイドとして発信し、地域の環境を支えていく意識を高める。

土橋小学校の校舎には、様々なエコに関する技術が生かされている。トイレが節水型になり、以前に比べると半分の水量で済むようになっている。他にも蛇口の締め忘れを防ぐ自動水栓、太陽光パネル、風力発電計や雨水タンクなどの設備がある。また、温められた空気が上に上がっていくことを利用した仕組みである「風の塔」や「風のやぐら」が設置されている。子どもたちは様々なエコな施設や設備から体感や実験・測定などを通して事象を正しくとらえ、そこで得られたデータをもとに、自ら問題意識をもち、解決する学習に取り組んでいる。6年生の子どもたちは「エコガイド」として校舎のエコ技術を案内しながら、自分の考えを話し、見学者から意見を聞いてさらに考えを深めていく活動を行っている。興味をもった箇所をエコガイドポイントと決め、シナリオを書いたり、もう一度データを収集したりして、より具体的に説明ができるように取り組んできた。さらに高次の「特級エコガイド」を目指すため、校舎の建築に携わっていただいた設計士の久保久志氏にエコガイドを体験していただき、専門家の立場から講評・助言をいただいた。子どもたちはそこから新たな課題を見つけ、シナリオの加除修正や説明の仕方などを改善していくことで、もっと自分の考えや学びを伝えたいという思いを募らせていった。10月末に行われたユネスコスクール交流会では、実験とポスターセッション写真による説明を「ミニエコガイド」と位置づけ発表し、土橋小の校舎の工夫やその魅力について伝え、学びの成果を発信することができた。

ユネスコスクール交流会発表にて

成果

エコガイドといっても単に校舎の案内ができる子どもを目標にしているわけでない。環境問題にどう向き合っていくか、その課題に対して自分に何ができるかを考えることが大切である。環境に配慮した望ましい働きかけを地域や社会にしたいという心を育てることができたことが大きな成果であった。

実践内容❷
「校舎から省エネを学ぼう」

ねらい：観察や検証実験を通して省エネについて学び、どのように校舎を活用していくか考える力を付ける。

設計士の久保さんとトイレについて学ぶ

学習の始めに、改修工事を行った校舎で、ストローを吹き矢としたエネルギーの実験を通して、省エネとは、「使わないこと」ではなく「有効に使うこと」であると実感し、子どもたちは強い衝撃を受けた。そこで、「トイレ」「夏を快適に過ごす工夫」「冬を快適に過ごす工夫」の３つの観点に着目し、検証実験を行った。「トイレ」では、トイレカード（独自で制作したエコカード）を利用し、節電、使いやすさ、掃除のしやすさの視点でよりよいトイレについて考えられていることを知り、設計者や先輩たちの思いや工夫に驚いた。「夏を快適に過ごす工夫」では、給気ガラリやらんまが本当に役に立っているのか比較実験を行った。「冬を快適に過ごす工夫」では、断熱材の効果や扉の効果を確かめる実験を行った。それぞれの学習の中で、校舎を設計した久保さんを招き、より専門的な話や、思いを聞き、また、６年生のエコガイドにも触れ、具体的に学ぶことができた。

成 果　検証し、設計者の思いを聞くことにより、校舎を正しい使い方で有効に使おうという意識が生まれた。また、疑問や考えを検証することで確証に変わることや、模型を使ったり比較をしたりして考えることが有効であることを学ぶことができた。

実践内容❸
「この木　何の木　気になる木」

ねらい：「マイ木」を決め、調べたり観察したりすることを通じて、自然を大切にする心を育てる。

マイ木を決める（トヨタの森の方と）

４年生は、年間を通して「マイ木」の観察を行っている。校内の樹木を観察し、その特徴や樹木が環境とどうかかわっているかを学んだ。子どもたちは、木々が季節によって違う姿を見せることに関心をもち、マイ木に愛着をもって、観察や世話を行った。「緑探検ウォークラリー」では、４年生が樹木に関する問題を作り、全校児童で問題を解きながら土橋の自然に親しんだ。また、開校当時植樹に関わった方々の思いを知ることにも重きを置いた。どのような経緯で、どのような思いをもって樹木が植えられたかを、植樹に関わった方から直接聴くことで、自分たちは学校からだけでなく地域からも土橋小学校の木を任されているのだという思いをもちながら樹木と関わることができた。また、落ち葉も積極的に活用し、「落ち葉プロジェクト」として、落ち葉をためてたい肥にし、木々の根元にまいた。

成 果　観察を続けるなかで、樹木に対する愛着だけでなく、人や樹木に集まってくる小さな生き物が樹木から多くの恩恵を受けていることに気づくことができた。そして、大切な樹木を、来年に引き継いでいく役割を担っていることを実感することができた。

おわりに

本校は、ESDの視点に立った授業改善を行ってきた。ESDカレンダー（環境教育プログラム）を作成し、「生活科・総合的な学習の時間」を中心に、自然観察や自分たちの生活、校舎内の環境から個々の児童が課題を見つけ、主体的にそれを解決していく学習を構成し実践している。秋に実施される「緑探検ウォークラリー」では、自然の中での活動を通して感性を磨くとともに、異学年ペアで互いに助け合う活動をすることで思いやりの心を育てることを実践している。暮らしの中から環境と自分との「つながり」に気づき、課題解決のために行動できる意欲と能力を高め、多用な価値観をもって、多くの人と協働することができる子どもたちを育んでいきたい。

環　境 | 国際理解 | 地域文化 | 人　権 | 生物多様性 | 防　災 | エネルギー | その他

豊橋市立岩西小学校

創　立：1951年
住　所：〒440-0841 豊橋市西口町字西ノ口25番地の4
連絡先：TEL 0532-61-2557　FAX 0532-65-1209
学級数：19　児童数：493人
H　P：http://www.iwanishi-e.toyohashi.ed.jp

ぼくたち、わたしたちの町“大好き！岩西”

はじめに

本校では、地域の人・もの・自然とすすんで関わることで、地域に学び、地域との関わりを深める子どもを目ざして、総合的な学習の時間・生活科・道徳を関連づけた教育活動を展開してきた。校区の自慢できる場所の発見とその紹介、校区に在住する広い視野をもった方からの学び、さらに、祭礼や町自治会の活動など校区の取り組みを知ることができた。

教育課程を見直し、学年間の接続を俯瞰的・計画的に進めるためにESDカレンダーを作成し、更新している。継続的な実践を行うことで、将来にわたって地域のよさを知り、地域に住む自分といった意識を高めていくことができ、岩西が好きな子どもを育んでいけると考えている。

実践内容❶
校区のよいところをみつけよう『岩西よいとこ大作戦』

ねらい：住んでいる地域の人・もの・自然のよさに気づき、地域のために活動をすることができる。

社会科の校区探検から始まった３年生の本実践。知らないことがまだまだたくさんあることに気づき、家族や上級生に岩西校区のよい所をインタビューした。教えてもらった人や場所の中から自分の興味のあることを調べに行くためのグループを編成し、探検に出かけた。その際、保護者ボランティアをお願いし、安全面での確保をした。初めて会う方も多かったが、校区の方は快く子どもたちを受け入れてくださり、質問に丁寧に答えてくださった。７月、子どもたちが調査してきたことの報告会を各学級で行った。自分たちが調べてきたことをより多くの人に知らせたいという思いの一方、学級の友達から質問されて答えられず悔しい思いをもった。また、他のグループの調査を聞いて自分たちもこういう質問をしたいという思いももち、新たな探検への意欲が高まった。９月の２度目の探検は、もっと詳しく調べるために、質問項目を前回以上に深く考えて行った。どの方も岩西校区のことを考えてくれていて、岩西校区・岩西っ子が好きだと思ってくださっていることが分かった。探検を通して詳しく調べたことをもっと多くの人達に知らせたいと、２年生と今回の学習でお世話になった地域の方々、及び３年生の保護者を招待して、「岩西よいとこ発表会」を行った。分かりやすく伝えるため、発表方法を工夫し、絵や写真や実物を見せたり、クイズを取り入れ説明したことを確認してもらったりした。今後は、もっとよい岩西校区にしていくためにはどうしたらよいかを考え、それを発信していく活動につなげていく予定である。

インタビューして思いを知る

工夫して発表する子どもたち

成　果

本実践を通して、自分たちの暮らす岩西校区の良さを再発見することができた。また、探検を通し、地域の方と顔見知りになることができ、校外でも声をかけ合うことのできる子どもも増えた。校区の良さというのは、場所だけでなく、住む人の温かさがとても大切だという思いを共有することができた。

実践内容❷

『夢を信じて』～地域で働く・思いを知る～

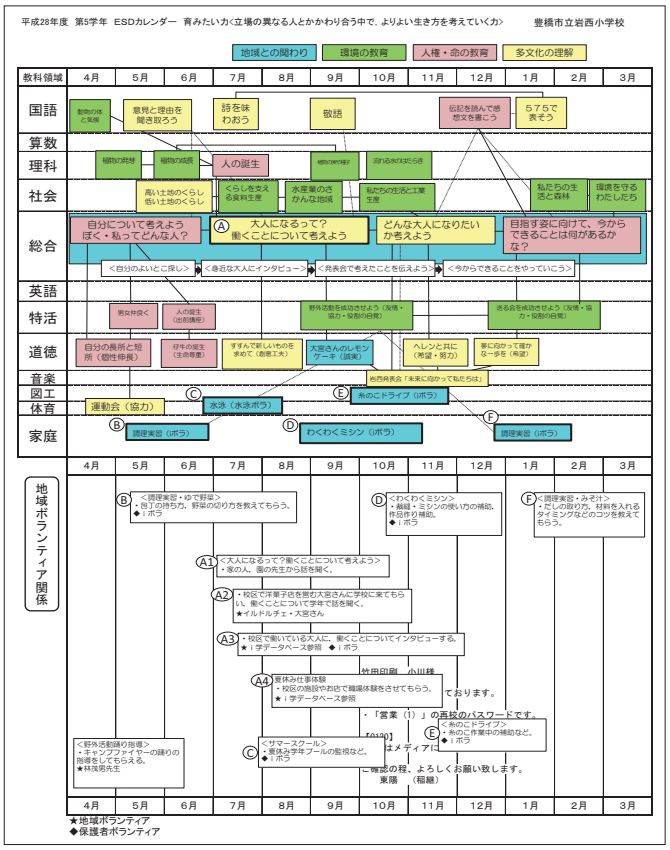
ねらい：住んでいる地域の人など身近な人とのかかわりを通して、自分の将来に目を向け、毎日の生活の向上を図る。

洋菓子店を営む大宮さんから大いに学ぶ

5年生は地域の方とのかかわりを通して、自分自身を見つめ直したり、どんな大人になりたいかを考えたりしている。そして思い描く自分の将来像に向かって、「今」できることを考え、自分の良さや友達の良さに目を向けながら行動できるようにしている。

子どもたちの漠然としている大人についてのイメージをはっきりさせるために、子どもたちがこれまでの学習で何度かお世話になった地域の洋菓子店の方に話を伺った。洋菓子店の仕事の大変さや自分の作った商品が売れることへの喜び、これからの夢を語る姿などに子どもたちは真剣に聞き入った。仕事へのこだわりや新たな夢をもち働く姿に触れた子どもたちは、大人はどのような思いで働いているか関心を高めた。もっといろいろな人に聞きたいと考えた子どもたちは、これまでの学習でお世話になった地域の方や身近な大人へのインタビューを行った。仕事によって、人によって考えていることは違うけれど、大変でもやりがいがあり、がんばって働いていることを知った。

大人はどんな思いで働いているか、もっと知りたいと考えた子どもたちは、夏休み期間中に実際に仕事の体験を行うことにした。学校にあるデータベースをもとにして地域の職場へ「仕事体験」を依頼した。以前も引き受けたことがあるからと多くの職場で快く受け入れていただくことができ、これまでの地域とのつながりが、いかに大切であるかをあらためて感じた。1日のうち3時間程度であったが、普段とは違う環境での活動に対して、充実感を得ていた。あいさつや掃除などは、学校でも仕事でも大切であるということを子どもたちは学ぶことができた。子どもたちは、仕事は思っていた以上に大変だということを知った。さらに、大変であっても、いつも笑顔で楽しそうに働く姿に感動し、そして保護者への感謝の気持ちをさらに高めたり、こんな大人になりたいという思いを強くしたりすることができた。



成 果

地域の方の協力で「仕事体験」をさせてもらうことで、仕事の大変さを感じ、大人はどのような思いで働いているのかを実感することができた。仕事体験を通し、自分の将来の夢やどんな大人になりたいかを考えるきっかけとなり、普段の自分がどのような行動をしていけばよいか考えることができた。

おわりに

生活科・総合と道徳、教科領域を横断的につなぐESDカレンダーをつくり、どんな力を育み、どんな題材や教材を使って、体験や言語活動をするのかを明らかにしてきた。子ども見守り隊、図書館整備、読み聞かせ、国際放課後教室、プール指導、フェスタ&バザーなどの分野で年間延べ1,500名を越えるボランティアの方々の協力をいただいてきた。今後も地域のSD（持続発展）のために課題解決にむけて、人の行動変容を支えるサイクル（知る―考える―気づく―行動する）が回っていくようにベストを尽くしていく。

地域のステキな人、自然、ものを発見し、大切に思い、「わたしもこうなりたい、こうしたい」という心を育て、未来への責任感を育んでいく。

環境 | 国際理解 | 地域文化 | 人権 | 生物多様性 | **防災** | エネルギー | **その他**

岡崎市立竜南中学校

創　立：1986年
住　所：〒444-0806 岡崎市緑丘二丁目17番地
連絡先：TEL 0564-54-4400　FAX 0564-54-4401
学級数：18　生徒数：548人
H　P：http://www.oklab.ed.jp/weblog/ryunan/

地域が誇る「竜南いのち守り隊」

はじめに

「南海トラフ巨大地震が高い確率で発生する」と言われて久しい。そうした状況の中、2011年３月11日に発生した東北地方太平洋沖地震は、私たちに震災の恐ろしさを感じさせた。人間の想像をはるかに超える自然災害を防ぐことはできない。しかし、被害を減らすことはできるはずである。一番大切なのは、生き残ることである。

本校では、「自分の命を自分で守る」ことを目標に防災学習に取り組んでいる。また、中学生が、自分の命を守る行動を取ることが、地域住民の命を救うことに繋がるとも考えている。

地域を導く防災リーダーとなるべく、生徒たちは日々防災学習・ボランティア活動に取り組んでいる。

実践内容❶「地域の防災リーダーになろう」

ねらい：防災学習を通して、持続可能な地域社会の担い手となる生徒の育成

本校では、1、２年生のころから、全校生徒による追究活動「竜南いのち守り隊」として、生徒たちは意欲をもって防災学習に取り組んでいる。中でも３年生は、年間を通して特に力を入れている。

１学期は「つかむ」段階として、防災オリエンテーションや、防災講話などを行い、漠然としか知らなかった地震について学ぶ。

２学期の防災学習を前に、夏休みには東北復興支援訪問として宮城県の荒浜中学校と漁業協同組合、閖上震災を伝える会を訪れ、現地の人と交流することによって、災害というものを目の当たりにする。この経験は、２学期に生かされていく。

防災のエキスパートとしての自覚を持たせるために、学年を衣食住の３つに分け、それをさらに細分化したカテゴリー学習を行った。生徒一人に一つの専門性をあたえ、少ない人数で協力しながら「追究する」段階とする。このときに、東北を訪問した生徒が中心となり、「中学生にできること」「自分たちが住む地域に必要なこと」を考えながら学習を進める。

３学期には、防災学習のまとめとして「防災フェスタ」を開催する。１年を通して学んできた防災学習を１、２年生に発表する。３年生は後輩に「伝える」段階として、「分かりやすく」「楽しく」を考えて発表の準備を行う。そうすることで、３年生は知識を定着させ、また、その体験的な発表を聞くことにより、１、２年生にも楽しみながら学べるものとなる。発表を通して、３年生は防災リーダーとしての自覚をより一層高め、１、２年生は防災学習に興味をもつことで「竜南いのち守り隊」の活動を引き継いでいる。

地域を知る。災害図上訓練（DIG）

成果

一人に一つ専門性をもたせることで、深く追究することができた。また、防災フェスタの中では、それぞれのカテゴリーで学んだ内容を共有することができた。３年生が１、２年生に発表する姿からは、防災リーダーとしての自覚が表れていた。学んだ知識を家庭で生かし、地域に広めていくことを期待したい。

実践内容❷

「中学生と地域とを繋ぐボランティア活動」

ねらい：地域から頼りにされていると知り、地域の担い手であると自覚する生徒の育成

学区小学校夏祭りボランティア

夏休み中には、多くの生徒が希望し、ボランティア活動を継続的に行っている。

学区小学校の夏祭りボランティアでは、準備段階から運営に携わっている。学区に小学校は２校あり、両校の地区委員からそれぞれ依頼をされている。生徒は、会場の清掃を行った後に、担当となる出店の準備に移る。ヨーヨー風船や輪投げ、射的など種類も豊富である。

「高年者センター岡崎」では、夏祭りの運営と本校オーケストラ部の演奏を行っている。夏祭りでは、生徒会役員がかき氷の販売を行ったり、盆踊りに参加したりして会場を盛り上げている。オーケストラ部の演奏は、多くの施設利用者の方が楽しみにしているイベントの１つである。

防災学習の一環で行うのが、東北地方復興支援訪問である。今年度は亘理町漁業協同組合を訪問し、職業体験をさせていただいた。津波被害の恐ろしさを知るとともに、復興に向けて活動されている方のお手伝いをさせていただいた。また、亘理町立荒浜中学校を訪問し、ベルマークの寄贈式を行った。ラジカセやキーボードペダルに変えて、使っていただいている。

環状線道路清掃ボランティアでは、自分たちが登下校で使用する道路を、ごみ袋を片手に歩く。地域の方々と会話しながら一緒に活動を行っている。今年度は100名近くの生徒が参加した。

昨年度から依頼されるようになったのが、学区小学校寄贈品バザーボランティアである。販売から警備まで、様々な係を任されている。

加えて、学区の防災訓練にも多くの生徒が参加している。運営ボランティアとして昨年度は100名を超える生徒が参加したため、今年度は３年生に限定して活動を行った。それでも50名近くの生徒が活動に取り組んだ。地域の方に頼りにされているという実感を得ることができた。

今年度、新たな取り組みとして、ボランティアの方と災害派遣ボランティア体験を行った。どのような仕組みでボランティアが派遣されるのか、またボランティアに必要とされることは何かを学んだ。

また、生徒会役員が企画したのが、公園清掃ボランティアである。日程の関係で３年生限定としたが、50名程度が参加を表明した。残念ながら雨天中止となってしまったが、生徒のボランティアに対する意欲の高さがうかがえた。

年間を通して行っているのが、ベルマーク収集とプルタブ回収、ペットボトル回収である。生徒会役員が中心となって情宣することで、全生徒が協力する活動となっている。

多種多様な活動を通して、地域との関係性が構築されている。互いに助け合っていることを生徒は身をもって感じることができ、「地域のために」という地域愛をもったボランティア精神を抱くことができている。

地域の方と道路清掃ボランティア

成 果

今年度、第20回ボランティア・スピリット賞の全国表彰式で、「SPIRIT OF COMMUNITY奨励賞」を受賞した。これは自分たちの活動に誇りをもつには十分な評価であり、「これからも地域のためにボランティア活動をしていきたい」との声が多く聞かれた。活動に誇りがもてたことや、地域に根付いてきたことが成果である。

おわりに

本校は、５年前から防災学習やボランティア活動を特色ある取り組みとして始め、継続的に活動を行っている。学校全体で、これらの活動に対する意識が高まっており、「ボランティア活動は、参加するもの」「３年生になったら防災学習を行う」という考えが、当たり前のものとなってきている。こうした考えは、自覚を促し、新たな活動へと向かわせる。先輩から受け継いだものを重んじながらも、自信をもって新たな取り組みに参加していく。

いつ必要になるかが分からないのが、防災学習である。その知識は明日、いや１年後、10年後に必要となるかもしれない。今、この瞬間かもしれない。だからこそ、「今、学ぶ」ということを大切にして「竜南いのち守り隊」の活動は今日も続いていく。

環　境 | 国際理解 | 地域文化 | 人　権 | 生物多様性 | 防　災 | エネルギー | その他

豊橋市立中部中学校

創　立：1947年
住　所：〒440-0813 豊橋市舟原町154番地
連絡先：TEL 0532-54-8108　FAX 0532-57-1963
学級数：20　生徒数：597人
H　P：http://www.chuubu-j.toyohashi.ed.jp

つなげよう！ ひと・いのち・こころ

はじめに

中部中学校は、豊橋市の中心部にあり、校区に多くの商業施設や幹線道路が見られる。反面、農業用地や自然は乏しい。

1980年には、TBW（豊川 BIG WALK）が初めて実施された。これは、約30kmの距離を歩く行事である。母なる豊川にふれる機会として、今でも続く伝統的行事として行われている。1999年には、竜巻が襲来し、大きな被害に見舞われた。しかし、在籍していた生徒はもちろんのこと、PTAの方や地域住民の方、中部中卒業生の力を借りて、中部中を立て直すことができた。これは、地域住民に防災意識を喚起する契機となった。現在は、環境学習や防災学習を中心に持続可能な社会づくりの担い手を育む教育を進めている。

実践内容❶「中部校区の防災・減災を考える」

ねらい：防災に関する校区の課題を見つけ、主体的に課題を解決しようとする態度を養う。

近年、日本では集中豪雨から起こる水害や土砂災害、火山噴火などが頻発しており、近い将来においても、大規模な地震が予測されている。また、校区住民の防災意識を高めるきっかけとなった竜巻の襲来時には、今の中学生はまだ生まれていない。このような時代に生きる子どもたちにとって、防災をもっと身近なものとして浸透させ、地域の防災力を高めていきたいと考え、本校１年生は防災・減災について学ぶことにした。

導入では、生徒に「自然」のイメージを聞いた。「緑」「きれい」といった言葉が出たあとで過去のさまざまな自然災害の映像を見せると、その恐ろしさに驚いている様子であった。また、豊橋市役所防災危機管理課の方に来ていただき、現在想定されている東海大地震が起きた場合、どのような被害が出るか、具体的な数字をあげて説明をしていただいた。多くの生徒から「防災マップを作りたい」という意見が出たため、校区を調査し、手作り防災マップを作ることになった。

手作り防災マップは、地震、火災、津波など、地域の特徴に合わせてテーマを決めて作る絵地図である。校区のどの地域でどのような災害が起こる可能性があり、そのときどこにどうやって逃げればよいのか、どう立ち向かうかを確認し、それをまとめて作成する。そのために生徒は出身小学校区ごとにグループを作り、地元の現地調査や聞き取り調査をした。手作り防災マップの完成後の発表会では、お互いに伝え合うことを通して、校区全体の実態を理解し合った。

手作り防災マップ発表会

成　果

この学習を通して、子どもたちは災害が起こったときにどのように行動するべきかを具体的にイメージできるようになった。いざというときに中学生として、単に助けられる立場ではなく、助ける立場であるという自覚も見られるようになった。また、校内の避難訓練に臨む態度も見ちがえて主体的になった。

実践内容❷

「豊川 BIG WALK～挑戦!! 新しい自分への道～」

ねらい：自然に対する畏敬の念を感じ、自然に親しむとともに、環境保全と郷土を愛する心を育てる。

豊川沿いを上流に向かい往復する長距離歩行をTBW（TOYOGAWA BIG WALK）と呼んでいる。今年で36回目を迎える伝統行事であるが、そのときどきの生徒の状況や教師の願い、地域の要請に合わせて、参加学年・コース・距離などが少しずつ変化している。昨年度は、1月23日に2年生生徒190名と保護者や校区在住の希望者が参加した。生徒は、同じペースで歩行できる3～6人で班を作り、挑戦した。

出発は、まだ冬の寒さが身にしみる午前7時。学校に集合し、出発式後、順にスタートした。参加者は、班で協力しながらひたすら歩く。チェックポイントでイラストマップにスタンプを押してもらいながら、歩行途中で自然の雄大さ厳しさを感じ、ときには自然のいたずらとも言える突然の雨に降られながら、歩を進めた。また、仲間と励まし合ったり、交通安全指導に協力してくださる保護者の方に見守られたりすることで人とのつながりを感じたはずである。

昨年度のTBWでは、帰路で「牛川の渡し」を利用した。豊橋に住んでいても利用したことのない生徒がほとんどで（TBWで初めて知る生徒も多い）、当日は船頭の操る渡し船を十分に楽しんだ。豊橋の古い歴史を味わうとても貴重な体験となった。さて、今年度は、実施にあたり、2年生から実行委員を募り、準備を進めた。TBW通信を発行したり、案内看板やイラストマップ、チェックポイントのスタンプなどを生徒の手で作成したりした。どの生徒も、一生懸命自分の仕事に取り組み、TBWの成功を支えてくれた。

仲間とともにひたすら歩く

こうして、道中で「ひと・いのち・こころ」のつながりを感じつつゴールにたどり着いた時、生徒たちは、達成感とともに個人の成長と集団の成長も獲得している。

本年度は、1月21日に創立70周年記念TBWとして2年生が参加する。『新歩』（ニューステップ）～TBWの主人公は君だ～というスローガンのもと準備を進めている。
今後も生徒のアイデアを生かし、保護者や地域の理解と協力を得ながら、よりよい行事に発展させていきたい。

〈女子生徒の感想〉

このTBWで、私は「協力」「友情」「感謝」をたくさん感じました。これは短い言葉だけど、本当に「気持ち」がこもっていると思います。TBWをやってよかったなと思いました。苦しい中にも楽しいことがたくさんあったように感じます。

牛川の渡しを渡る2年生

成 果

TBWは、達成感や協働の喜びを得られる活動となっている。また、食料の供給・チェックポイントでの指示などを通じて、地域住民や同窓生との協力体制がしかれており、人とのつながりを大切に考えるようになった。更に、伝統行事に参加することで学校への所属意識を高めることができた。

おわりに

1年生の防災学習では、身近な地域の中から課題を発見し、地域の方や行政の方と関わりながら課題を解決していくことができた。

2年生の長距離歩行行事では、体力や精神力の向上だけにとどまらず、仲間や周囲の大人たちとのつながりを感じ、郷土の環境保全にも目を向けられるようになった。

これからも活動を更に充実させるために工夫を加えていきたい。そして、中部中校区や豊橋市をより深く知り、所属意識を高めていくことで愛着や誇りをもたせていく。それが、持続可能な社会づくりの担い手を育むことにつながっていくと考えている。

環境 | 国際理解 | **地域文化** | 人権 | 生物多様性 | **防災** | エネルギー | **その他**

名古屋市立宝神中学校

創　立：1976年
住　所：〒455-0832 名古屋市港区宝神一丁目77番地
連絡先：TEL 052-383-1504　FAX 052-383-9478
学級数：18　生徒数：580人
H　P：http://www.hojin-j.nagoya-c.ed.jp/

生き生きと学校生活を送る生徒の育成

はじめに

本校では、学校環境の持続を目指した、ESD（持続可能な開発のための教育）に取り組んでいる。そこで、生徒に対して、「自分の子供も通わせたくなる学校」という目標を設定した。この意識を持って、生徒が人と人とのつながりを大切にし、思いやりの心を持って生き生きと学校生活を送れるように実践を進めている。

また、学校内の環境だけではなく、地域の環境も大切にし、現在の生活を生徒達の子供の世代まで持続させ、更に発展させられるように考えることで、生徒の意識の定着を図っている。

実践内容❶
「宝中交流隊」

ねらい：地域のお年寄りとの交流を行うことで、お年寄りに対する思いやりの心を育む。

本校では、地域のお年寄りとの交流を10年以上継続的に行っている。全校生徒より有志を募り、季節のお便りから始まり、学校行事への案内、交流会の企画・運営を行った。

本年度は、約140名の生徒が有志として参加した。また、夏休みに平和・防災学習として、地域のお年寄りに、代表生徒がインタビューを行った。

平和・防災学習は戦後70年を機に、活動を開始した。本年度は、学区近くの名古屋市港区ポートビルにおいて、シベリア抑留について学ぶ機会があった。生徒は、戦中・戦後の生活を知り、平和の大切さを感想に書いていた。また本校は、伊勢湾台風で大きな被害を受けた地域である。インタビューの中で伊勢湾台風の被害と、その対策を知ることで、地震と津波から身を守ることができるというお話を聞くことができた。

今年のお年寄りとの交流会には、約30名の方に参加していただいた。交流会では、体育館を飾り付け、お年寄りをお迎えした。一緒にお話したり、歌を歌ったりして、一時を過ごした。中でも、平和・防災学習の発表時に、お年寄りからのお話に生徒が聞き入っている姿が印象的であった。

お年寄りと接する中で、トイレまで優しく案内したり、段差を気遣ったりする生徒も多く見られた。特に、３年生は１・２年生の生徒をリードし、手際良く会を運営することができた。そして、交流会後の季節のお便りでは、年賀状を作成した。手書きでの年賀状作成は、一人一人が思いを込めている様子であった。

宝中交流会「平和学習発表」の様子

成果

この活動は、１年生から３年生までの生徒が、学年の枠を越えて一緒に活動することができるという意義がある。

交流会に参加していただいたお年寄りから、「毎年楽しみにしています」「生徒から元気をもらいました」などの感想があり、生徒の達成感につながっている。

実践内容❷
「キャリア教育」

ねらい：いろいろな人の生き方を知ったり、体験学習を行ったりすることで、自分の将来の目標を考える。

中学１年生において、生活環境を知るために、学区近辺にある藤前干潟の学習と見学を行った。小学生の時に、同様の学習を行っているが、内容を深めた学習を行うことにより、地域環境への理解が進んだ。今年は、名古屋市環境局主催のオーストラリア・ジロング市との湿地提携に基づく人的交流事業に参加した生徒の報告が、全校集会で行われた。藤前干潟にいる鳥の移動距離を知ったり、オーストラリアの湿地と藤前干潟のつながりを知ったりすることで、地球規模での環境問題について、考える機会となった。

また、自分の将来を考える活動の一環として、JAXA職員による講演会を行った。そこでは、自分の目標とは大きく離れているように感じることも、努力することで達成に近付くという意識を持つことができた。学校外の方々から学ぶことにより、具体的な社会人像を意識する機会となった。

中学２年生では、１年生での学習を踏まえて、地域の事業所に協力をいただき、実際に職業を体験する学習を行った。また、車椅子で生活をされている方の講演を聞き、社会福祉について学んだ。これらの活動から、３年生での進路決定に向けての意識を高めた。

社会福祉学習において、「ふ：ふつうの、く：くらしを、し：しあわせに」という言葉を知り、誰でも暮らしやすい社会について考えた。講演会の後、車椅子での生活とお年寄りの生活を重ね、自分たちにできることを感想に記述する生徒も見られた。

藤前干潟での野鳥観察の様子

職業体験学習においては、体験した職業だけでなく、仲間が体験した職業を知ることにより、生徒の職業観を深めることができた。体験先への行き方を調べたり、体験先での話し方やマナーを練習したりする準備が必要であり、仕事を続けていくことの苦労なども感じている様子であった。働くことの大切さと保護者の方への感謝が感想の中に見られた。

中学３年生では、専門学校、高等学校等への進学や就職など、実際の担当の方からの講演を受けた。講演の一つで、「面接マナー講座」を実施した。生徒同士で、面接のロールプレイを行った。短い時間で、的確に表現することは難しいと感じていたが、ポイントを押さえることで、簡単にできた、他でも役立ちそうだと、感想に記述する生徒もいた。

３年間を通した活動を基に自らが考え、行動をしていくことにより、その後の生活を見据えつつ、進路決定を行った。

福祉講演会の様子

成 果

実際の仕事の内容を聞いたり、体験することで、生徒が自分の将来について考える機会となった。また、３年生において、上級学校の教員より実際の学校生活を聞くことで、進路に対する意識の向上が見られた。

加えて、キャリア教育は、地域の方々とつながる機会にもなっている。

おわりに

「分かった」「できた」、という体験から、授業や学校生活を「楽しい」と感じられるように、全校で継続的に実践を行っている。しかし、日頃の学校生活や学習の中において活動とのつながりを意識することが難しい。教育効果の向上を目指すために、日常の学校生活において、「つながり」を意識させ、生徒の自己有用感の向上を目指したい。

特に、３年間を見通した活動を行う際に、ESDを意識することが必要である。このことにより、生徒だけではなく、教員も共に学び、学校を持続させていこうとする意識の向上を図っていきたい。

環境 | **国際理解** | 地域文化 | 人権 | 生物多様性 | 防災 | エネルギー | **その他**

中部大学春日丘中学校

創　立：1990年
住　所：〒487-8501 春日井市松本町1105番地
連絡先：TEL 0568-51-1115　FAX 0568-52-3041
学級数：9　生徒数：293人
H　P：http://www.haruhigaoka.ed.jp/junior/

カナダ語学研修旅行での多文化共生学習

はじめに

本校の教育目標は、21世紀のオピニオンリーダーとして持続発展社会に活躍できる生徒の育成にある。その中で、国際感覚を身につけさせる国際教育では、外国人教師によるコミュニケーションや異文化交流の機会を設けることを行っており、その集大成として語学研修旅行でカナダにある２校の姉妹校を訪問し、その交流を通してカナダの言語、文化、民族などについて学ぶ機会を与えている。特に、多文化共生をテーマに事前学習から異文化理解を深め、持続発展社会を考える上で必要な側面である環境、エネルギー、人口問題など様々なテーマを知り、異文化交流会やホームステイ中のコミュニケーションなどから深く学んでいる。

実践内容❶「異文化交流会」

ねらい：日本の文化を学び、姉妹校で伝えると同時にカナダの文化を学ぶ。

例年、交流会では中学３年生の全生徒が日本文化を伝えている。内容は「よさこい」「折り紙」「武道」をはじめとした日本独自の伝統、文化、歌などの披露で、９月下旬より活動をはじめ、２月まで準備している。実行委員を中心に昼休みや放課後の時間を利用して活動している。

今年度は「よさこい」「折り紙」「歌」の披露を予定している。「よさこい」は本校のダンス部を中心に有志のメンバーで構成され、定期的に居残り練習しており、「折り紙」は小さな三角形のパーツを組み合わせた作品を制作している。また、「歌」は、音楽や朝学習の時間を利用して練習している「大地讃頌」を全員で合唱する。

また、今年度はカナダの文化を交流会で知るだけではなく、姉妹校の生徒と共に資料館などを訪問して、カナダ建国の歴史などについて学ぶ校外学習も予定している。

（なお、実践内容の成果と写真コメントは昨年度のものである。）

GMS校での日本文化（踊り）の披露の様子

成果

語学研修５日目、ホストファミリーの生徒と一緒にそれぞれの学校へ登校して授業を一緒に受け、その後、文化交流会を行った。時間をかけて丁寧に作成したプレゼントの披露、竹太鼓・演武・踊りを披露した。生徒たちの顔はやりきった充実感であふれていた。

実践内容❷

「多文化共生学習」

ねらい：国際社会で共感、協調して生きていくためのテーマに沿った事前学習を行い、現地調査を行い、報告する。

カナダ語学研修旅行に備えて、理科や社会の授業の中で、さらには特別授業を課し、ESD学習を踏まえた自然科学、科学技術に関する諸問題やカナダや民族について広く学習している。さらに、ESD学習として様々な課題を自らの問題としてとらえ、身近なところから取り組む。次に、現代社会の課題を知り、その課題の解決につながる価値観や行動を生み出して持続可能な社会を創造していくことの必要性を学ぶ。その原因に向き合って、解決するためにできることを考える。また、自然と命のつながりを感じ、伝統や文化に触れながら、人と自然、人と人との共存や多様な生き方を学ぶための第一歩として、いくつかのテーマ*から生徒一人一人または班で１つ選択する。10月頃から具体的な事前学習を行い、日本での問題点や現段階での自分の意見などを日本語と英語でまとめる。

＊設定されているテーマ：環境、人口、エネルギー、国際理解、生物多様性、気候変動、防災、世界遺産、地域文化など（学年によって異なる。）

次に、カナダ語学研修中のバンクーバー班別研修での現地交流やホームステイ中のインタビューで、個人テーマについての自分の意見を発信、共有し、カナダでのとらえ方やインタビューした人の考え方をまとめる。

昨年度の研修記とESDレポート。
クラスごとに作成した。

帰国後はすべてのテーマにおいて、多文化が共生し、持続発展社会を作るために行うべきことを考える機会を持ち、提言を考える。それを研修記にまとめ、プレゼンテーションで発表する。

成 果

各班ごとのテーマ一覧である。４～５名で班を編成し、個々でインタビューする具体的内容と予想される結果を事前学習し、現地調査を行い、研修後は簡単な発表会を行って相互評価した。

班	テーマ	具体的な内容
1	エネルギー～発電と貯蓄～	寒いカナダではどのように発電しているか
2	環境問題	環境問題に対する意識、取り組み、学校での教育内容
3	世界遺産	世界遺産登録までの経緯とその理由
4	絶滅危惧種	絶滅危惧種を保護する取り組み
5	環境問題	近年の異常気象とそれによる被害
6	カナダの人々にとっての世界遺産	世界遺産の認知度と対応
7	エネルギー	日本では原子力発電が問題に、カナダではどうか？
8	交通機関	カナダと日本の発達の違い
9	気候変動	異常気象の増加率の変動
10	環境問題	意識の有無と教育現場での取り上げ方など
11	環境	各家庭レベルでの省エネ活動について
12	中学校の年間行事	始業式、テスト、部活動などについて
13	ヒトに関する問題	今、何が問題視されているか
14	地域文化	公共交通機関のこれまでの発達
15	世界遺産	世界遺産への関心度と他の候補地について
16	都市環境	都市形成の違いについて
17	天然資源と環境	天然資源の利用と環境に対する配慮
18	世界遺産	世界遺産のあり方について
19	歴史	歴史の違いを調べ、そこから生活習慣の違いを学ぶ

おわりに

文化交流会の内容や個人テーマについては学年によって違いはあるものの、「多文化共生学習」というテーマにもとづいたカナダ語学研修における事前学習とホームステイを開校から24年間続けている。また、今年度からはカナダ姉妹校の日本語クラスからも数名の生徒を日本に受け入れて本校の中学３年生宅にホームステイしたり、ペンパルプログラムといった相互交流の場を設けたりしており、より国際教育と異文化理解の機会を作ることでESDについて考えることに力を入れている。

環境 | 国際理解 | 地域文化 | 人権 | 生物多様性 | 防災 | エネルギー | その他

名古屋市立名古屋商業高等学校

創　立：1884年
住　所：〒464-0044 名古屋市千種区自由ヶ丘二丁目11番48号
連絡先：TEL 052-751-6111　FAX 052-761-7508
学級数：24　生徒数：952人
H　P：http://www.nagoya-ch.ed.jp

葦から“Zoo”

はじめに

干潟や川辺に生える“葦”。一見、雑草のように思われるが、この植物は水質の安定化と生物多様性の維持に高い効果を発揮している。以前は計画的に刈り取りが行われ、それが葦の生育に関して良い循環をもたらしていたのだが、近年ではそのまま放置されている。

この葦を昨今のニーズに見合った製品として市場に送り出し、ひいてはそれが環境保全に繋がることこそ、エコロジカル・マーケティングに他ならない。これに基づき、各種の企業と交渉を重ねた結果、４種の製品を完成させた。それと同時に、楽しみながら環境保全活動に参加できるエコ・ツーリズムの企画にも取り組み、より一層の啓発効果を狙った。

実践内容❶「葦を原材料とした商品の開発」

ねらい：商品化に向けての製造プロセスを確立する。

製品計画の立案に際し、まず葦を布に変えることを目標とした。布にまで仕上げることができれば、その後の製品のバリエーションは飛躍的に拡大する。具体的には「葦→紙→糸→布→製品」の工程をたどることで、新商品の誕生を目指したのである。

そのための第一歩は、実際に干潟に生えていた葦の入手である。刈り取った葦を貯蔵している関係機関を探し当てるのに難航したが、唯一、葦を譲ってくださったのが稲永ビジターセンターであった。

これを紙にすべく製紙会社を訪問し、藤前干潟の葦を試料として提供したところ、『何とか紙にできそうだ』との返事をいただいた。さらに、この紙をミリ単位で裁断し、撚りをかけ、糸にしなければならない。しかし、これを現実の生産ラインに乗せるには、トン単位の材料が必要とのこと。よって、以前に葦から作った糸を在庫として保有している紡績会社にその糸を発注した。

葦群落における水質調査

次に、糸を布に織り上げる業者を紹介していただくため、津島毛織工業協同組合を訪問し、紡織の委託先について相談した。同組合から織物業者の紹介を受け、私たちが目標とした葦布は現実のものとなった。さらに商品の付加価値を高めるため、有松絞りによる染色を施し、「地元の伝統工芸との融合」というセリングポイントを付け加えた。

そして、この布地が商品としての適正な品質を備えているのかを証明するため、尾張繊維技術センターへ鑑定を依頼したところ、諸検査の結果、実際に流通している既製品と遜色のない品質を保証することができた。

続く工程は布の縫製である。安価な加工賃でも厭わずに引き受けてくださったのが、社会福祉法人名身連第一ワークスと名古屋刑務所であった。こうして、水質の安定化と生物多様性の維持に寄与しうる４種の商品が産声を上げた。

第１の商品は「着脱が簡単な三角巾“葦からZoo”」、第２の商品は「軽～いサコッシュ“葦がぁる”」、第３の商品は「おしゃれなポケットティッシュカバー“葦ゃんてぃ”」、そして最も新たに開発した商品が「移動ポケット“葦すと”」である。

最後に、開発した商品をどのように販売するかという流通チャネルを構築しなければならない。国内だけでなく、

世界に環境保全のメッセージを発信することを目的に、中部国際空港にある土産物店と交渉を重ねたところ、同店の店頭に陳列する了解を取り付けることができた。このようにして、原材料の調達から店頭販売に至るまでのプロセスが完成したのである。

移動ポケット“葦すと”

成 果

商業高校生であればこそ、エコロジーを声高に叫ぶだけでなく、ビジネス活動と連動させながら、葦の有効な利用法を模索した。これにより、適正な利潤をもたらすビジネスモデルを確立することができれば、資金や技術面などの活動基盤が強化され、活動の継続性も補強される可能性を実感した。

実践内容❷

「エコ・ツーリズムへの取り組み」

ねらい：葦をモチーフとして、環境保全を啓発する。

環境活動に注目を集めるには、その前段として、興味・関心を呼び起こす“何か”が必要なのでは?と考え、レジャー感覚で楽しみながら環境問題への理解を深めるエコ・ツーリズムの展開にも取り組んだ。

具体的には「くるみボタン製作」と「葦紙のランプシェード作り」の２つの工作教室を企画した。くるみボタン製作とは、開発した葦布に思い思いの絵を描いてもらい、それをボタンに仕立てる工作。葦のランプシェード作りとは、空き牛乳パックに葦の繊維を混入した手漉き紙を用いて、ランプシェードを組み立てるという工作である。

どちらもワークショップとして、環境保全に関連したイベントにおいて実施した。体験者は小さなお子さんがほとんどであったが、同伴の保護者の方々にも、葦への関心を高めていただけたと自負している。

さらに、環境保全を訴えかけるアニメーションを制作した。その内容は、干潟に生息する生き物をキャラクターに変え、彼らが進行役となって、葦が自然界で発揮している効果や環境保全の必要性などを解説するというものである。これをイベントの冒頭で上映し、関心を集める動機付けとして活用している。その際には、性別や年齢の関係なく、その場の人々の視線が自然に画面へ向き、楽しんでいただいている様子が見受けられた。こうした『環境保全活動に参加してみませんか?』と気軽に声を掛けられる催しを実施することで、環境活動への機運を盛り上げたいと願っている。

工作教室の開催

成 果

先に述べた商品開発と、このエコ・ツーリズムを通しての啓発活動を同時に展開することで、互いに相乗効果を発揮し、より強い訴求力を生み出しているように思う。これにより、葦の有効利用、さらには葦原の保全にまで多くの人々の意識が拡大して行くことを期待している。

おわりに

活動の内容を校内で紹介したり、PTAの皆様にも発表を聞いていただく機会を得て、この活動に対しての認知も次第に高まっているように思う。また、エコ・ツーリズムの一環として実施したワークショップでも、来場者から『葦にこのような活用法があるとは知らなかった』との驚きの声や、『アパレル素材の新たな可能性を感じる』などの将来性を示唆する言葉を頂戴した。さらには、活動の意義に共感してくださった方々からの便宜を受け、現在、地域の観光地や名産品を紹介する津島総合案内所において、この取り組みの成果である開発商品が展示されている。今後は、より確かな流通のチャネル作りを目指して活動を推進したい。

環境 | 国際理解 | 地域文化 | 人権 | 生物多様性 | 防災 | エネルギー | **その他**

愛知教育大学附属特別支援学校

創　立：1967年
住　所：〒444-0072 岡崎市六供町八貫15番地
連絡先：TEL 0564-21-7300　FAX 0564-22-8723
学級数：9　児童生徒数：61人
H　P：http://www.fuyou.aichi-edu.ac.jp

コミュニケーション力の育成をめざした取り組み

はじめに

本校におけるESD教育の重点は、「人とのかかわりを通して、社会的な意識を高め、社会に参加できる態度を育む」ということである。学校生活を終えた子どもたちが、社会へ出たときに、その社会の中で人とコミュニケーションをとったり、主体的に人とかかわったりすることができるようにしていきたいと考えている。ESD教育を通して、本校が願う子ども像は、

①人とかかわることの楽しさや喜びを感じられる子
②主体的に人とかかわることのできる子
③人からの働きかけを受け入れることのできる子

である。

実践内容❶「なかよしタイム」

ねらい：異年齢集団活動の中で人とのかかわり、仕事の進め方や遊び方、道具や遊具の使い方などを学ぶ。

なかよしタイムとは、全校縦割り班の活動である。小学部から高等部までの児童・生徒が12班にわかれて活動する。一つの班には、小学部、中学部、高等部の児童生徒がバランスよく入るようになっており、一つの班が5、6名で構成されている。また、班の中で、2～3人のペアを組み、特に一緒に活動する相手がいる。

異学年ペアでの外遊び

なかよしタイムの時間には、班ごとに、教室や運動場で遊んでいる。遊ぶ内容については、班を担当する教師が、班の子どもたち全員が楽しめるように、活動内容や支援を考えている。

また、遊ぶ活動だけではなく、運動会に向けて全校での表現活動や競争遊戯などを練習するときもあり、ペアでふれあう機会をできるだけ多くもつ工夫をしている。

楽しい活動を共有する中で、子どもたちには、仲間意識がうまれてくる。また、異年齢で班を構成していることで、高等部や中学部の子どもたちが小学部の子どもたちの手を支えたり、優しく声をかけたりするなど、主体的にかかわろうとする姿が見られるようになる。小学部の子どもたちも、いつも接しているペアの子の顔を見てにっこりしたり、差し出された手を握ったりするなど、友達からのはたらきかけを受け入れる姿が多く見られるようになる。

成果

このように、なかよしタイムで友達とかかわり合う活動を通して、子どもたちは、友達とかかわることの楽しさや喜びを感じることができるようになったと考える。また、集団でかかわることを通して、順番を守ったり、遊具を共有したりするなど、相手を意識した行動が多く見られるようになった。

実践内容❷
「地域交流」

ねらい：学校外での活動を積極的に取り入れることで、コミュニケーション能力を高めたり広げたりする。

地域交流として、隣の小中学校の児童・生徒と一緒に遊んだり、行事のプログラムを交換したりしている。また、近隣の店舗や家を訪問し、地域の方々に学校行事のプログラム配布を行っている。

本校小学部は、近隣にある愛宕小学校の５年生児童と交流を行っている。本年度は、１年に３回の交流があり、一緒に本校の運動場で遊んだり、愛宕小学校にあるミカンの木で、ミカン狩りをしたりして、楽しい時間をすごすことができた。

同じ敷地内にある附属岡崎小学校とは、共有している農園で、一緒にいもほりを行った。いものつるを一緒に引っぱって、大きなサツマイモが土から出てきたときには、歓声があがった。また、収穫したサツマイモは、後日、焼きいもにして、みんなで仲良く食べた。本校の児童が、附属小学校の子に焼きいもを二つに折って差し出す場面も見られた。

運動会や学芸会などの行事の前には、本校と附属岡崎小学校の生徒会・児童会役員が、プログラムの交換を行い、

運動会プログラム配布

近隣校との交流活動

「ぜひ見に来てください。」と話したり、招待状を書いたりして、お互いの学校の行事に招待をしている。

また、附属岡崎中学校のバザーには、本校の高等部が製作した作業製品を毎年出品している。バザーの前日には、附属中学校の体育館の舞台に立ち、バザーの宣伝をする。そして、バザーの当日は、はっぴを着た、本校高等部の生徒会役員が販売を行っている。多くの方とふれ合い、商品を買っていただいたとき、子どもたちはとても誇らしげな表情を見せ、それまでよりも大きな声で「いらっしゃいませ。」と言うことができるようになった。

運動会や学芸会の前には、プログラムを持って近所の店舗や家庭をまわる。プログラムを両手に持ち、「がんばりますので、見に来てください。」など、ことばを添えてお渡ししている。近所の方からも「がんばってくださいね。」など、あたたかいことばをかけていただいたり、行事の当日に来ていただいたりすることができた。

成 果　子どもたちは、学校の中で過ごしているだけではなかなかふれ合うことのできない方たちに積極的に働きかけることができるようになった。また、このことで、自分たちの活動や、がんばっていることをたくさんの方に知っていただくよい機会にすることができたと考える。

おわりに

わたしたちは、本校の子どもたちが卒業して、社会にでたときに、自ら人にはたらきかけたり、人からのはたらきかけを受け入れたりできるような、社会的態度を養うとともに、子どもたちが、その子らしく、生き生きと過ごし、周りの方たちから愛されることを願ってやまない。子どもたちの、社会に参加できる態度を育むために、私たちは、日々子どもたちのかかわりを大切にし、支援していきたいと考えている。そして、友達や教師、地域の方々とのかかわりを今後も持続し、子どもたちが、無理なくコミュニケーション力を高めていくことができるように、教育活動に取り組んでいきたいと考える。

あま市立甚目寺小学校

創　立：1872年
住　所：〒490-1111
あま市甚目寺寺西40番地
連絡先：TEL 052-444-0040
FAX 052-444-9640
学級数：22　児童数：660人
H　P：http://www.city.ama.ed.jp/sho_jimokuji/

交流
8月20日(土)

【交流先】
養老町立広幡小学校

創　立：1873年
住　所：〒503-1323
岐阜県養老郡養老町
口ケ島196-2
学級数：6
児童数：97人

交流概要

目 的

甚目寺小は、名古屋市の西に位置するあま市の甚目寺地区にある。甚目寺地区は、尾張四観音の一つである甚目寺観音の門前町として古くから栄えた地域である。

この歴史ある地域を舞台に、本校では地域学習に力を入れて取り組んできた。この取組が認められ、平成24年にユネスコスクールへの加盟が認められた。そこで、それまでの地域学習を「ふるさと甚目寺」をテーマとしたESD活動へと深化・発展させるとともに、アルミ缶やペットボトルキャップの回収、書き損じハガキの回収などの活動にも取り組むようになった。

そのような中で、他校の取組を知ること、関わりの範囲を広げていくことなどを目的として、平成27年12月より、隣県のユネスコスクールである岐阜県養老町立広幡小学校との交流が実現した。始めはメールによる学校紹介や互いの取組について作品を交換する活動を行っていたが、今回の国内交流派遣で、実際に広幡小を訪問し、直接的な交流の機会をもつことができた。

今回の交流活動では、主に次の２つをねらいとして取り組んだ。

まず、他校と直接交流を行うことで、本校の活動を推進していくためのよい刺激になることを期待した。周囲の環境や学校規模の違う広幡小の取組に触れることで、共通点や違いを認識し、甚目寺小の活動に新しく取り入れたり、今までの活動の改善点を見つけたりできないかと考えた。

次に、自分達でも大きなことができるという自信と、今後の主体的な活動へとつながる行動力育成をねらいとした。そのためには、広幡小への情報発信の活動を通して、どれだけ広幡小の児童の心を動かせるか、また、本校の児童がどれだけ交流のよさを感じられるかがポイントになると考えた。そこで、発表内容や形式を児童が中心となって考え、聞く側の立場を意識して準備を行うようにした。

プレゼンテーションを行う本校の児童

日程表

8月20日(土)	7:50　甚目寺会館集合 あま市～養老町 9:15～10:15 **「養老町立広幡小学校」交流** 養老町～あま市

プレゼンテーションを行う広幡小の児童

内 容

今回の交流活動は、広幡小の全校出校日に合わせて８月20日㈯に行った。本校からは児童代表として、６年生６名と５年生３名の計９名が参加した。

まず、本校の児童が広幡小の全校児童の前でプレゼンテーションを行った。甚目寺小について、「甚目寺の地域や歴史」「甚目寺小学校の紹介」「ESD活動について」「甚小クイズ」の４つのテーマに分けて紹介した。「ESD活動について」では、地域の中心的な産業である刷毛作りや自動車部品製造業、甚目寺観音や漬物の神様を祭る萱津神社、人形浄瑠璃として古くから伝わる甚目寺説教源氏節など、甚目寺の産業や文化に関わる５・６年生の取組を紹介した。発表後には、広幡小の児童から、甚目寺の歴史や文化、クイズの中で取り上げた人口の増減で歌詞が変化する校歌などについて、多くの質問や感想が寄せられた。反響の大きさに、本校の児童が満足げな表情をしていたのが印象に残った。

次に、広幡小の児童会によるプレゼンテーションが行われた。「ふるさとを大切にする心」という考えのもと、各学年がテーマを決め、地域の自然や歴史・文化について学習したり、地域の人々と交流したりする活動や、学校で集めた文房具や衣類をカンボジアに送る活動など、広幡小の取組が紹介された。本校の児童は、絶滅危惧種の魚である「ハリヨ」が生息しているという、都市部の甚目寺とは違う広幡小の豊かな自然環境を知ることができた。また、カンボジアを支援したり、カンボジアの方を招いて話を聞いたりするという、スケールの大きな活動に広幡小が取り組んでいることを知り、驚いた様子であった。

笑顔で話し合う子どもたち

互いのプレゼンテーションが終わった後、本校の児童と広幡小の児童会のメンバーとの交流を行った。特にテーマを設けず、移動しながら自由に話し合う形式とした。始めは初対面ということもあり、あまり話ができなかったが、間に教師が入ってきっかけを作ると、次第に打ち解け会話が進んでいった。ユネスコスクールやESDの活動だけでなく、普段の学校生活の様子なども話題に上り、驚いたり、笑い声が出たりするなど、和やかな雰囲気で交流を行うことができた。交流している相手を身近に感じられる場面となった。

参加した児童・生徒の声

- 今までは自分の学校のことしか知らなかったが、他の学校も工夫した活動を行っていることを知ることができてよかった。また、直接交流し、話ができたことで、名前しか知らなかった広幡小学校のこともよく知ることができた。これからも交流を続けていきたいと思った。
- それぞれの地域に大切にしている自然環境や文化・伝統があることが分かった。そして今回の交流活動を通して、甚目寺の文化や産業について見つめ直すことができ、改めてそのよさに気づくことができた。学習したことを生かして、もっと多くの人に甚目寺のよさを伝えていきたいと思った。
- 広幡小が外国に寄付をする活動に取り組んでいることを知り、世界とつながっていることがすごいと思った。みんなに紹介し、新しい活動として甚目寺小でも取り組んでみたいと思った。

おわりに

今回の交流活動は、本校児童にとって、ESD活動の視野を広げるきっかけとなった。広幡小の取組に刺激を受けて、児童に「やってみたい」という主体的な思いが生まれてきた。今後、参加した児童を中心に、子ども主体のESD活動が展開できるよう支援していきたい。

また、「ふるさと甚目寺」のテーマのもと、地域学習を継続し、地域の担い手となる人材を育てていくとともに、学習で培った地域を大切にする思いを、甚目寺から日本へ、そして世界へと広げていけるようにしていきたい。広幡小との交流だけでなく、ユネスコスクールのネットワークを生かして、他校・他地域との連携も模索していきたいと考えている。

岡崎市立新香山中学校

創　立：1984年
住　所：〒444-2141
岡崎市桑原町字大沢20番地86
連絡先：TEL 0564-45-2026
FAX 0564-45-7803
学級数：14　生徒数：410人
H　P：http://www.oklab.ed.jp/weblog/sinka/

交流
8月8日(月)
～
10日(水)

【交流先】
気仙沼市立階上中学校

創　立：1947年
住　所：〒988-0238
宮城県気仙沼市
長磯中原125
学級数：7
生徒数：113人

交流概要

目 的

本校は、岡崎市の最北端に位置し、市の中心部から十余キロメートルもの遠隔の地である。学校の東には段戸の山に連なる山々と渓谷、西は豊田市と接する巴川、南は村積山・ふもとを流れる霞川、北は群界川等のある自然豊かな地域にある学校である。生徒はそれらの豊かな自然から多くのことを学んでいる。だからこそ、自然を大切にし、自然に感謝する心を育みつつ、自然は無尽蔵ではないということを実感し、より高い意識で環境に学ぶことができると考える。そこで、本校の恵まれた自然環境を大いに活用した環境学習を通して、将来の環境について危機感や切実感を抱きつつ、環境問題を自分事ととらえ、自らの行動意欲を高めさせたいと３年間で系統的に学習を展開させている。また、地域で大切にしているササユリの保護活動をはじめ、清掃活動など様々な地域の活動にも「ふるさとを愛する心」のもと、積極的かつ自主的に取り組んでいる。各活動に取り組む真摯な姿から、現在も生徒は高い意識で環境学習をしていることがわかる。しかし、系統化された学習・活動は、見通しをもって計画的に進められるという反面、新鮮さに欠け、「新たな発見」も少なく、マンネリ化も否めないという課題が出てきた。また、平成24年の研究発表会当時とは、学級数や学習環境も大きく変わり、現状に即した取り組みにするための見直しが必要であった。そのような折に、階上中学校との学校間交流の機会をいただいた。交流を通して、地域学習に限らず、グローバルな視点から他の地域との関わりを考えさせた教育活動を展開していくことができないかと考えた。また、他地域との比較などから多様な考え方ができるようにし、より自分自身や自分の住む地域に目を向け、地域への愛着を深めるとともに自分が環境を守ろうとする意識を高めていくこともねらった。さらには、抱いた思いを「行動化」へとつなげていくような実践を目指したいと考えた。

両校の学習内容を報告している様子

日程表

8月8日(月)	8:30　名古屋駅集合 名古屋～東京～仙台 13:00　**「仙台七夕まつり」見学** 仙台～岩手・平泉 16:00　**「世界遺産・中尊寺」見学** 岩手・平泉～気仙沼　泊 気仙沼市内ホテル
8月9日(火)	ホテルから移動 9:00～12:00　**「階上中学校」交流** 13:00　**「震災復興語り部」研修** シャークミュージアム・魚市場周辺 階上地区など 気仙沼　～**「南三陸被災地視察」**(車窓)～ 宮城・女川　泊 女川市内ホテル
8月10日(水)	女川　～**「石巻被災地視察」**(車窓)～ 9:30　**「日本三景・松島」見学** 松島～仙台～東京～名古屋

階上中生の案内でグラウンドの仮設住宅を見学する様子

内 容

階上中学校では、防災学習の最終目標として、「未来の防災リーダーの育成」を掲げ、自助・共助・公助の３つをテーマに実践している。１年生で「津波のメカニズム」、２年生で「救急救命・応急手当」、３年生では「防災啓発活動」を軸に学習を展開している。それらの学習の理解を深めるために、防災カルタの実施や、避難訓練や避難所設営、災害図上訓練などを行うことで、知識として得たものを有事の際に発揮できるようにしている。

また、震災被害の風化防止も最重要課題の一つとして掲げ、多くの学校と交流し、交流の際、活動の一環として生徒に震災のことを語らせる機会を設定している。生徒は、語るたびに震災について考え、見つめ直すことを繰り返す。その活動を続けることで、風化防止意識の持続を図っているということである。

そのような情報をもとに本校２・３年生の学級代表８名と生徒会担当教員２名が夏休みを利用し、階上中学校に行き、交流活動を行った。グラウンドの仮設住宅の案内では、アスファルトで舗装され、グラウンドとは思えない状態に本校の生徒は衝撃を受けていた。また、学校の脇に作られた仮設グラウンドにも案内された。そこは、狭いだけでなく、石もごろごろとあり、とても厳しい環境であった。生徒にとっては、想像を超えた実態を実際に目にしたり、聞いたりすることで、衝撃も大きかったようである。グラウンドに限らず、校舎のひびが震災当時のまま

両校の生徒がともに防災カルタに取り組む様子

の痛ましい現状に、震災から５年以上経過した今もなお不自由な中で生活をしている同年代の生徒がいることを知り、自身の平穏な環境を再認識したに違いない。階上中の生徒と一緒に行った防災カルタや新聞スリッパ作りでは、楽しみながら、防災について学ぶ姿が見られた。ゲームや制作活動を通して、「防災」についての関心も自然に高まっていた。また、自身の地域の「防災」についても目を向けるとともに、階上中がキーワードとして掲げている「自助・共助・公助」の考え方に着目し、自分に何かできることはないかと「行動化」への意識を抱いた。抱いた思いや学んだことを全校生徒に発信する場を設定したことで、「行動化」への意識をより高めることにもつながった。今後は地域にどう発信するかが課題である。

参加した児童・生徒の声

- 身近な人と助け合って共助していくためにも、自助が大事だと思った。私は、緊急時にどこに避難すればいいか、家にどんな備えがあるのかを知らないので、今後に向けてどんな準備ができるのかを家族と一緒に考えたい。
- 新香山中学校は、海から遠いので津波の心配はないが海抜どれくらいの高さにあるのか気になった。新香山中学校では、避難訓練くらいしか防災対策を行っていないので、他にはどんな防災対策があるのか、またどんなことをしていかなくてはならないのかについて学習してみたいと思った。
- 階上中学校は、「防災」について、全校生徒が真剣に考え、危機意識をしっかりともって活動に取り組んでいると思った。僕たちの学ぶ「環境」についても、もう一度学び方を見直し、自分の地域を守るという意識をみんながもてるような活動を工夫していきたい。

おわりに

ご指導いただいている文部科学省視学官田村学先生より、課題として「クリエイティブな思考のできる生徒」を目指したいとご示唆いただいた。本交流活動は、まさに新たな一歩として位置付けることができる。交流活動は他校と比較しながら、自らを見つめ直し類似性や特殊性を再認識する良い機会となる。何より、同世代の生徒の多様なものの見方や考え方に触れることは、大きな刺激となった。新たな気付きは、「もっと学びたい」という次への意欲につながる。生徒自ら次の課題を見付け追究する姿は、まさに「クリエイティブな思考」にもつながっていくと考える。今後、より深い学びにつなぐために「行動化」のプログラミングに目を向けさせていきたい。

名古屋大学教育学部附属中・高等学校

創　立：1947年
住　所：〒464-8601 名古屋市千種区不老町
連絡先：TEL 052-789-2680
FAX 052-789-2696
学級数：15学級（中学校6学級 高等学校9学級）
生徒数：598名（中学校240名 高等学校358名）
H　P：http://highschl.educa.nagoya-u.ac.jp

交流
8月25日(木)～26日(金)

【交流先】
奈良女子大学附属中等教育学校

創　立：1947年
住　所：〒630-8305
奈良県奈良市
東紀寺町一丁目60-1
学級数：19学級
（前期課程9学級 後期課程10学級）
生徒数：737人
（前期課程364名 後期課程373名）

交流概要

目 的

本校がユネスコスクールに登録されたのは2011年である。また、2015年には文部科学省からSGH（スーパーグローバルハイスクール）研究指定校に指定された。中学では課題探究Ⅰ、高校では課題探究Ⅱをすべての生徒が履修している。中学１年のテーマは「生き方を探る」、中学２年は「生命と環境」、中学３年は「国際理解と平和」。各学年のテーマに沿って、生徒は調べ学習を中心に個人研究やグループ研究を行い、幅広い興味関心を持つための取組を行っている。高等学校では、課題探究Ⅰ（中学）の中で自分が特に興味を持った分野に関して、個人研究テーマを設定し、仮設検証型研究を行う。生徒が取り組む課題研究の分野を、本校では現代社会が直面する地球的課題として、６つの領域（生命・自然と環境・心・人権と共生・平和・文化）に分類している。生徒は６つの領域のどこかに所属し、PBL（Problem Based Learning）に基づき３年間継続して研究を行う。そして３年目には、研究成果を各自で論文にまとめる。６つの領域のうち、生命・自然と環境・心の各分野で課題研究を行っている生徒はモンゴルへ、人権と共生・平和・文化の各分野で課題研究を行っている生徒は米国ノースカロライナ州へそれぞれ10名が選抜されてフィールドワークに派遣される。モンゴルでは「環境問題」を中心に、米国では「人権問題」を中心に、現地の高校生と協同で研究活動を行う。本校の国際交流の特徴は文化交流だけではなく、研究課題を海外の高校生と実施することにある。奈良女子大学附属中等教育学校も本校と同じように、研究課題を海外の高校生と実施している。今回の交流目的は、ディスカッションを通して、双方の生徒が、国際交流の意義や目的を生徒レベルで考えること、そして、海外で行う国際的な研究活動をどのように活性化し推進するべきかを生徒個人が明確化することである。

本校生徒によるプレゼンテーションの様子

日程表

8月25日(木)	9:00　近鉄名古屋駅集合 名古屋～大和八木～近鉄奈良 13:30～16:30 **「奈良女子大学附属中等教育学校」交流**（1日目） ～宿泊先へ移動　泊 奈良市内ホテル
8月26日(金)	ホテルから移動 9:30～12:00 **「奈良女子大学附属中等教育学校」交流**（2日目） 13:00　**「奈良公園周辺」**（見学） 近鉄奈良～大和八木～名古屋

移動中にも発表の準備

内 容

奈良女子大学附属中等教育学校との交流会は、双方の活動発表とその内容に関してのディスカッションを２日間で２回行った。本校の発表は、モンゴルで行った「環境調査とその分析結果」と、米国で行った「人権問題」に関する発表についてである。

経済成長が著しいモンゴルでは、都市部を中心に環境悪化が急速に進んでいる。本校生徒がモンゴルの田舎（サンサル村、アルタンボラク村）と都会（ウランバートル市）で行った大気調査と水質調査の結果と、モンゴルの環境問題改善に関して、本校の姉妹校である新モンゴル高等学校の生徒と協同で行った実践について奈良女子大学附属中等教育学校の生徒に発表した。また、日本は、現在グローバル化が急速に進んでいる。その結果として起こることが予想される課題について、多文化共生社会で生活している米国の高校生から意見を聞いた。そして、改善策について米国の高校生と一緒に考案した。その内容も今回の交流会で報告し、奈良女子大学附属中等教育学校の生徒とディスカッションをした。

奈良女子大学附属の生徒と学校ツアー

プレゼンテーションの内容にもとづきディスカッション

奈良女子大学附属中等教育学校は、国際交流班に参加している後期課程の生徒がディスカッションに参加した。発表の内容は、インドネシアで開催された“International Students Forum”という会議に出席した時のことが中心であった。具体的には、「労働人口の減少を解決する策」について、現地で話し合った内容であった。この会議には、８カ国の高校生が参加し、同じテーマで議論するというものである。

ディスカッションの結果、学んだことをこれから自分たちの生活の中でしっかりと活かすことで、自分たちの活動が本物になるのだ、という認識を双方の生徒が持ち、今後も取組を継続していくことが大切であるとの認識を持った。

参加した児童・生徒の声

- 奈良女の生徒から「米国人は、人権問題に関心があるのですか」という質問を受けた。自分自身の考えが少しあいまいであり、答えに困ったが、質問に答えながら考えているうちに、自分の考えもまとまってきた。ディスカッションは、自分の考えを伝えるだけではなく、自分の考えを整理することができるということがわかった。
- ディスカッションでは、奈良女の生徒は「外国人の視点で日本人を考える」という構成であり、私たちの発表は「日本人の視点で外国人を考える」というものであった。両者の考えを合わせて考えることによって深い考察ができた。
- 今後は、生徒たちが積極的に参加したいと感じるような行事や環境を作ることが大切だと思う。閉鎖的な環境にとらわれずに、今回のように対外的に学習する機会はすごく貴重な経験になった。

おわりに

ユネスコスクール活性化事業（ユネスコスクール交流会）に参加することにより、県外のユネスコスクールとつながりを持つことができた。多くの高等学校は、それぞれ独自に素晴らしい取組を行っているにもかかわらず、その成果をなかなか外に発表する機会に恵まれない。今回のような生徒間の交流会は、参加生徒にとっても学校にとっても大きな刺激となり励みともなった。今回の交流事業が単発なものではなく、奈良女子大学附属中等教育学校と学校間での継続的な発展につながったことは大きな成果である。

愛知県ユネスコスクール交流会

全国一の規模を誇る愛知県のユネスコスクールの支援とESD（持続可能な開発のための教育）活動の広がりをねらいとして、日頃ESD活動に取り組む小学校・中学校・高等学校、特別支援学校が集う交流会を開催しました。ESD（持続可能な開発のための教育）活動の紹介を通じて、持続可能な社会づくりの重要性について未来を担う子どもたちが学び合いました。ここに集う子どもたちの輝く笑顔は、わたくしたちの心にESD活動の大切さと未来への希望を届けてくれました。

当日は、ユネスコスクールを中心とした小学校から高校までの児童生徒や教職員等約350名が集い、活動発表や意見交換を行いました。

※上記のほか、ワークショップには延べ500名ほどの参加がありました。

日 時　平成28年10月29日㈯ 正午から15時
主 催　愛知県教育委員会
後 援　日本ユネスコ国内委員会、ユネスコ・アジア文化センター（ACCU）、中部ESD拠点協議会、ESDコンソーシアム愛知

交流会プログラム　12:45～15:00　名古屋市公会堂 4Fホール

12:45～12:50	**開会行事**（主催者挨拶） 愛知県教育委員会 教育長　平松直巳
12:50～13:35	**基調講演** 演題：「**持続可能なコミュニティを作るためにユニクロができること** **～グローバルとローカルの取組を通じて～**」 講師：株式会社ユニクロ CSR部 ソーシャルイノベーションチームリーダー　シェルバ英子 氏 ファシリテーター：EPO中部 チーフプロデューサー　新海洋子 氏
13:45～14:00	**国内交流派遣校活動発表**（分科会） 小学校部会……**あま市立甚目寺小学校**（岐阜県養老町立広幡小学校と交流） 中学校部会……**岡崎市立新香山中学校**（宮城県気仙沼市立階上中学校と交流） 高等学校部会…**名古屋大学教育学部附属中学校・高等学校**（奈良女子大附属中等教育学校と交流）
14:00～14:15	**ユネスコスクール活動発表**（分科会） 小学校部会……**犬山市立東小学校**「希望の未来を創ります！」 稲作体験、篠笛創作、日本の未来を考える討論会、日本の底力を伝えるパンフレット作りなどの体験活動を報告 中学校部会……**名古屋国際中学校**「国際生のグローバルな視野をもったチャレンジ」 「多文化共生と減災」「経済活動と貧困」「社会生活と循環」の3つのテーマについて活動を報告 高等学校部会…**愛知県立千種高等学校**「自分たちで考えて行動しよう！～知識だけでは終わらせない～」 「エシカルファッションショー」「農業体験」「みつばち」「エコキャップ活動」について報告
14:15～14:40	**ディスカッション**（分科会） 小学校部会……ファシリテーター：EPO中部 チーフプロデューサー　新海洋子 氏 中学校部会……ファシリテーター：文部科学省国際統括官付 ユネスコ振興推進係長　岡本彩 氏 高等学校部会…ファシリテーター：中部大学 中部高等学術研究所 国際ESDセンター 助教　影浦順子 氏
14:45～15:00	**まとめ** 文部科学省国際統括官付 ユネスコ振興推進係長　岡本彩 氏

ポスターセッション

基調講演

ワークショップ

ポスターセッション　12:00～12:40　名古屋市公会堂　4Fホール

12:00～12:15	**江南市立宮田小学校**……地域・人とのつながり **岡崎市立形埜小学校**……木の芽学習「人・もの・こと」のつながり **豊橋市立章南中学校**……汐川干潟保全実践プロジェクト **名古屋市立山田高等学校**……性講話を聞いて **名古屋国際高等学校**……グローバルに学び、活躍する国際生の挑戦 **愛知県立みあい特別支援学校**……共生社会の実現
12:15～12:30	**豊田市立土橋小学校**……ミニエコガイド～さまざまなエコの工夫～ **岡崎市立竜南中学校**……竜南いのちの守り隊（防災学習）活動 **愛知県立刈谷高等学校**……生物多様性調査～在来種の分布調査 **名古屋市立名古屋商業高等学校**……葦から“Zoo” **中部大学第一高等学校**……ESD部の始動・活動内容（環境活動） **愛知教育大学附属特別支援学校**……異年齢集団活動や地域交流の学び **愛知県立愛知商業高等学校**……愛知の発酵文化継承へ向けた取り組み紹介
12:30～12:40	**質疑応答**

ワークショッププログラム　11:00～15:30（随時）　鶴舞公園　噴水塔広場

① 株式会社ユニクロ	**「“届けよう、服のチカラ”プロジェクトの紹介」** •ラミネート写真掲示　•リサイクルBOX設置　•CSRレポート配布　•映像投影
② 愛知県立 愛知商業高等学校	**「今日から君も発酵マスター！～私たちの生活を支える発酵の仕組み～」** 甘酒などの発酵食品の原料クイズや実際に発酵食品に触れることで、 子供たちには「苦手意識を持っていた発酵食品を食べ、文化継承のきっかけ」に、 大人の方には、「何気なく食べていた発酵食品を味わうきっかけ」に。
③ 名古屋市立 名古屋商業高等学校	**「おえかきボタンを作っちゃおう！」** 葦（あし）から作られた布に好きな絵を描き、それを“くるみボタン”に仕立ててプレゼント。 〈販売〉葦布の三角巾・サコッシュ・ポケットティッシュカバー
④ ESDコンソーシアム愛知	**「間伐材でものづくりをしよう！」** 愛知県の人工林で育ったヒノキの間伐材（かんばつざい）を使った、パズル作り。
⑤ もりの学舎	**「いきぬきしおり」** 環境学習施設「もりの学舎」による自然体感プログラムの実施 （自然素材を使ったしおりの作成、葉っぱを使った自然あそびなど）

参加校

長久手市立東小学校	豊山町立志水小学校	豊橋市立吉田方小学校	岡崎市立南中学校	県立岡崎西高等学校
北名古屋市立師勝小学校	犬山市立北小学校	豊橋市立福岡小学校	岡崎市立新香山中学校	県立岡崎商業高等学校
北名古屋市立西春小学校	犬山市立東小学校	豊橋市立岩西小学校	岡崎市立竜南中学校	県立刈谷高等学校
北名古屋市立五条小学校	犬山市立西小学校	豊橋市立飯村小学校	安城市立安城南中学校	県立刈谷北高等学校
北名古屋市立師勝北小学校	江南市立宮田小学校	豊橋市立つつじが丘小学校	豊橋市立東部中学校	県立安城東高等学校
北名古屋市立栗島小学校	津島市立北小学校	豊橋市立向山小学校	豊橋市立中部中学校	県立豊田東高等学校
北名古屋市立師勝西小学校	あま市立甚目寺小学校	豊川市立御津北部小学校	豊橋市立豊城中学校	名古屋市立北高等学校
北名古屋市立白木小学校	半田市立板山小学校	設楽町立田峯小学校	豊橋市立吉田方中学校	名古屋市立山田高等学校
清須市立西枇杷島小学校	東海市立船島小学校	名古屋市立千代田橋小学校	豊橋市立章南中学校	名古屋市立名古屋商業高等学校
清須市立古城小学校	東浦町立藤江小学校	北名古屋市立師勝中学校	名古屋国際中学校・高等学校	中部大学第一高等学校
清須市立清洲小学校	東浦町立緒川小学校	北名古屋市立西春中学校	名古屋大学附属高等学校	日本福祉大学付属高等学校
清須市立清洲東小学校	岡崎市立形埜小学校	北名古屋市立白木中学校	県立千種高等学校	豊橋中央高等学校
清須市立星の宮小学校	刈谷市立富士松南小学校	北名古屋市立訓原中学校	県立愛知商業高等学校	愛教大附属特別支援学校
清須市立桃栄小学校	豊田市立土橋小学校	北名古屋市立熊野中学校	県立緑丘商業高等学校	県立みあい特別支援学校
清須市立春日小学校	豊橋市立八町小学校	北名古屋市立天神中学校	県立南陽高等学校	県立豊橋聾学校
清須市立新川小学校	豊橋市立松葉小学校	清須市立清洲中学校	県立春日井工業高等学校	愛知教育大学
豊山町立豊山小学校	豊橋市立松山小学校	清須市立春日中学校	県立長久手高等学校	中部大学
豊山町立新栄小学校	豊橋市立新川小学校	豊山町立豊山中学校	県立津島北高等学校	（順不同）

当日の参加者の声

今日の交流会についての感想

小学生	自分達の行っていることのすべてが世界に役立っていると思いました。また一人一人が行っている小さな思いやりのつまった行動が世界につながっていると思いました。
中学生	いろいろ活動を見て、一番に思ったことは、まだ日本には考え直す問題がたくさんあると改めて感じました。「人・もの・こと」のつながりや「東北へできること」などさまざまなものがありました。その１つ１つ問題を解決するためには、一人一人がその問題にまず関心を持つことが大事だと思いました。
高校生	年齢を問わず、色々な方と関わることが出来る良い機会だと思います。こういった交流会をさらに増やしていただきたいです。そうすることで、今日起こっている様々な問題解決の糸口になると思われます。ユニクロの活動についてもっと発信してほしいです。
教職員	今の自分を取り巻くいろいろなことにまず気づくこと、そして知ること、自分のことについてとらえること、そしてできることから行動すること。それが次へつながっていくのだと改めて感じました。自分で主体的に考えて行動している時、深く何かを考える時、自分の力が試せる時、自分が何かの役に立てたと実感する時、素晴らしい笑顔をいくつも見ることができてよかったです。
教職員	社会で今起こっている問題について、中学生たちが自分たちのこととしてしっかり考え、何ができるのか実践していること、次につなげようとしていることがすばらしいと思いました。今回学んだことを自分の学校にどう発信していくか。課題であり、自分の重要任務だと思いました。
教職員	他の学校の取組みを聞き合う機会をもつことは大切だと改めて感じました。今日の交流から新たな気づきが生まれ、新たな学びにつながっていくと思います。子どもたちの姿から、このような場を持つことの大切さ、必要性を感じました。子どもの多様な思いや発想を受け止め、広げていくためにも、教師が持つ役割は大きいと感じました。
保護者	持続可能な社会貢献を小学校の時よりすすめていけると良いと共感できたので、ESD活動を全国の学校で行えると良いと感じました。なぜ行うのか、何を行うか、目的は何か?本質を理解しないで行動だけしても持続しないし、その先への発展しないので、本質から伝えていただけると良いと感じました。

ユネスコスクールやESDの活動の充実のために、必要だと思うこと

小学生	他の学校の良い所、自分の学校の良い所を伝え合い、未来へつなげていくことが必要だと思います。
中学生	もっと様々な学校と自分たちのやっている活動を発表、共有してレベルアップしていくべきだと思った。
高校生	専門家やレベルの高い研究機関と連携することで、意欲も高まり良い活動ができる。
教職員	ユネスコスクール、ESDの活動の拡充、充実には、地域や企業の協力が不可欠です。そのためには一般向けの情宣をもっとした方がよいと思います。本日の発表から、ESDの取組は従来行ってきた「総合的な学習」や教科の予習で十分可能です。子ども達の興味・関心、そして社会への関わりを支え、応援してくれる県民・企業がもっと増えるとよいと思います。社会での認識が広がり、深まることがポイントですね。
教職員	柔軟に「これは良い」と思ったものをすぐに取り入れること。そこから創造的な活動を生み出す発想力。今の教職員にかけているかもしれない。
保護者等	他校との交流というより、市単位や県単位などの地域で分科会毎の活動が出来たらおもしろいと思ったので、まずは教職員が地域交流でネットワークを作り、続いて生徒が輪を広げていけたらと思う。それには休みも必要なので、学校の授業中に行うともっとよくなるのではないか。（地域共通の時間で交流）

国内交流派遣校活動発表（分科会）

ディスカッション（分科会）

ワークショップ

ユネスコスクール活動事例集　第4集

平成29年2月発行

愛知県教育委員会生涯学習課
〒460-8534 名古屋市中区三の丸三丁目1番2号
電　　話 052-954-6749（ダイヤルイン）
ファックス 052-954-6962